A431

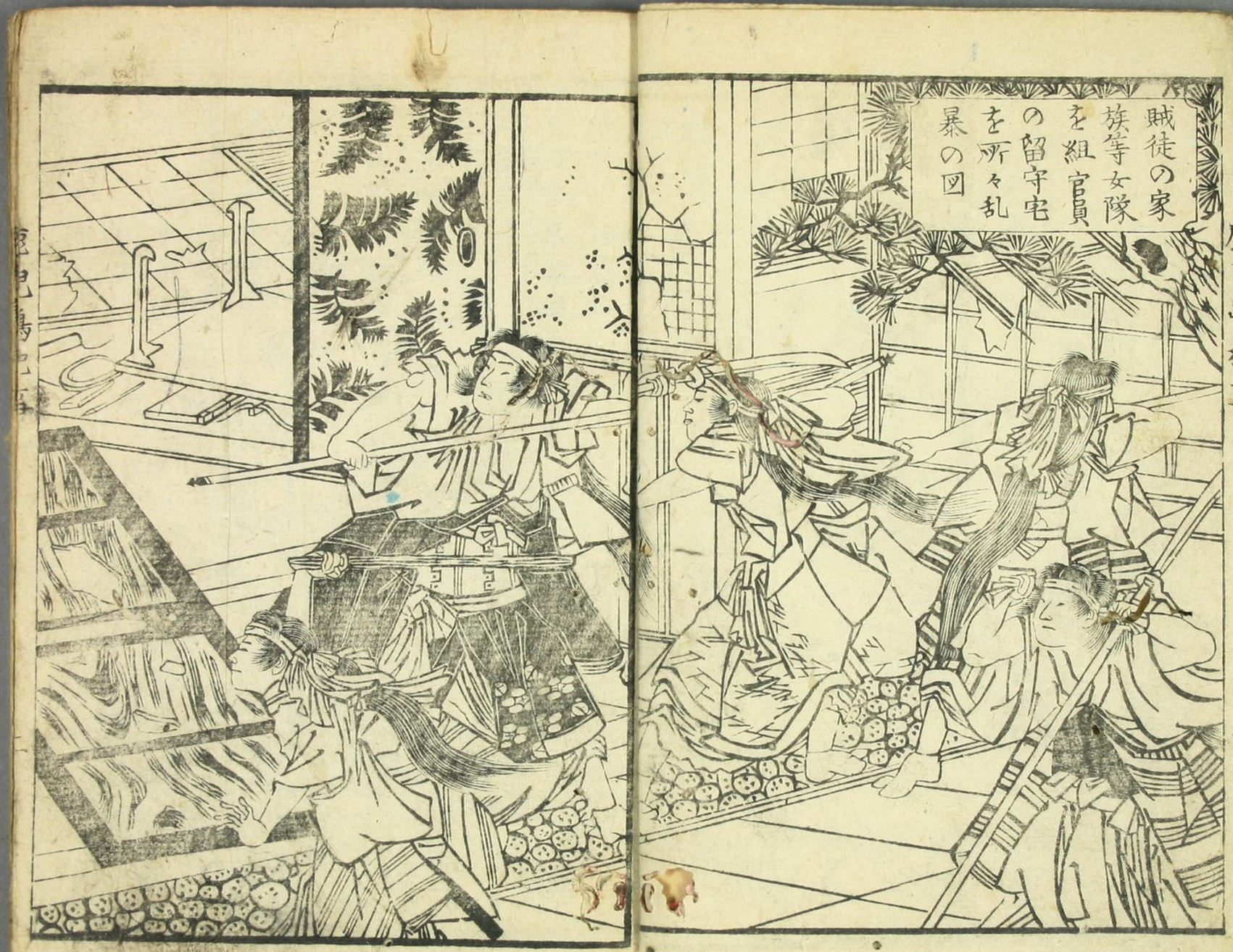
新政厚徳

鹿兒嶋藩新政府大總督
正三位陸軍大將西鄉隆盛 本陣

鹿兒嶋暴徒逆意を發しより數月過
雖未降伏の色なく萬民を害事幾と云數
を知ば西鄉い明智の聞へなりとも今
日の所業其志を解せば逆ハ正ふ敵せ
ば次弟と衰勢ゝるい天理也桐野利秋
打死せしい全く非ふして陣中指揮を
專とし逆意を揮盡力無怠と雖其終を
知らば

村井靜馬記

99-7918


賊徒の家族等女隊を組官員の留守宅を所々乱暴の図

鹿兒嶋暴徒単今般戰争を聞くふハ無名の軍も如何なり何ゞ名を付人氣を重萬民をゞづけんと種く工風を廻ら東京より帰縣なる中原尚雄中村野村園田

糞汁の中へ投込抔し嚴責苦息も止ぬ時ハ其茱を飲せ又ハ死を拷ふけ一九ろ死ふ生て牢内つゞき此上ハ死を

其外の面々を暴徒等俄ふ押寄せ無体ふ捕縛なし夫より日ゞ拷問ふ撫初めらる此方ハ何の故と云事を知ぬ暴徒等荒縄を以縊り上け鉄鞭を以て打懲し又ハ手足を志ぢり

待より外他事なし
と悲歎ふ迫り血
の涙を流しける

暴徒等申るハ何
も探索の為め帰
縣せしといふ書
面ふ拇印を無
理無体ふ押
たり

※西郷が大将ふ出陣
なさハ九
州地方ハ。

一夜
の内ふ
切り
抜け
ひ都へ
登る

押せる實ふ
惨酷の所業なり
暴徒ハ右の書面を
得て軍の名を
設けるも大切
ふなり
弥出陣ふ
極る今日
勢揃へ
熊本城
ハ五ろ
※

事
掌をうく。
きよりいと安し
イサ血祭
ふ中

原を
初め
其外
の者
を

牢より引
出し首を

虛空へ飛し刀の切味を心見と踏込又れ美經袴白鉢巻長刀を腰ゟ横ゟ腕まくりをとなすして

△中村其外を初め出ら宰を申つけら世間の様子ハ

勇ましく又宰内ゟて〻無實の罪ゟて血祭と残念至極と何ぞ歯ぎしをなしるも左なり又獄内の沙汰ゟて西郷ゟ總大將ゟて桐野篠原村田の三將精兵を引率し勇を振つて鹿児嶋を押出熊本路へ進み日ならぬ東京へ着し天下一変せるといふ噂故一同驚ろく今月十日中原△

去ぬ一同

今日ハ斬首ゟ又ハ磔ゟ成るゟゟらんと

覚悟をなし出牢
しける所只しらふ
暴徒ハ一人も居
らぬ官兵巡査が
居並びをなく
安心致さるよ最
早鹿児嶋ハ
勅使御入ハ成り
島津公父子ハ志
うくとしてて一同夢
かとのミ怪久ぐふて快
天を詠めてちょし
海岸ハいづると

官船ハ勢ひよく黒烟を立て
此船ハ乗り込兎も角も神戸へ
参らんとしてしの時の嬉し
さハ天ハも登る心地ハて實ハ
九死を遁れ一生を得し人くハ
兵庫ハ一度滞船なし東京へ来
と在又賊兵ハ熊本を引拂ひ
原より人吉街道コマ山とハ所へ
賊が哨兵を置二十里が間沿道
の村々へ兵隊が屯し人吉ハ
賊兵が充満し同所でハ雷管を
昼夜の別ちなく製造するとハふ
官軍方ハ次第と鹿児嶋へ繰込

五月五日の朝開戰ふなり官軍ハ城後の山ふ炮臺を築き中腹ふ柵を投け賊の柵際迫進むを待つて一時ふ發炮し賊の隊長野瀬弥九郎を討取り賊ハろうきいして

遂ふ官軍ハ熊本へ

錦の御旗へ敵しげ

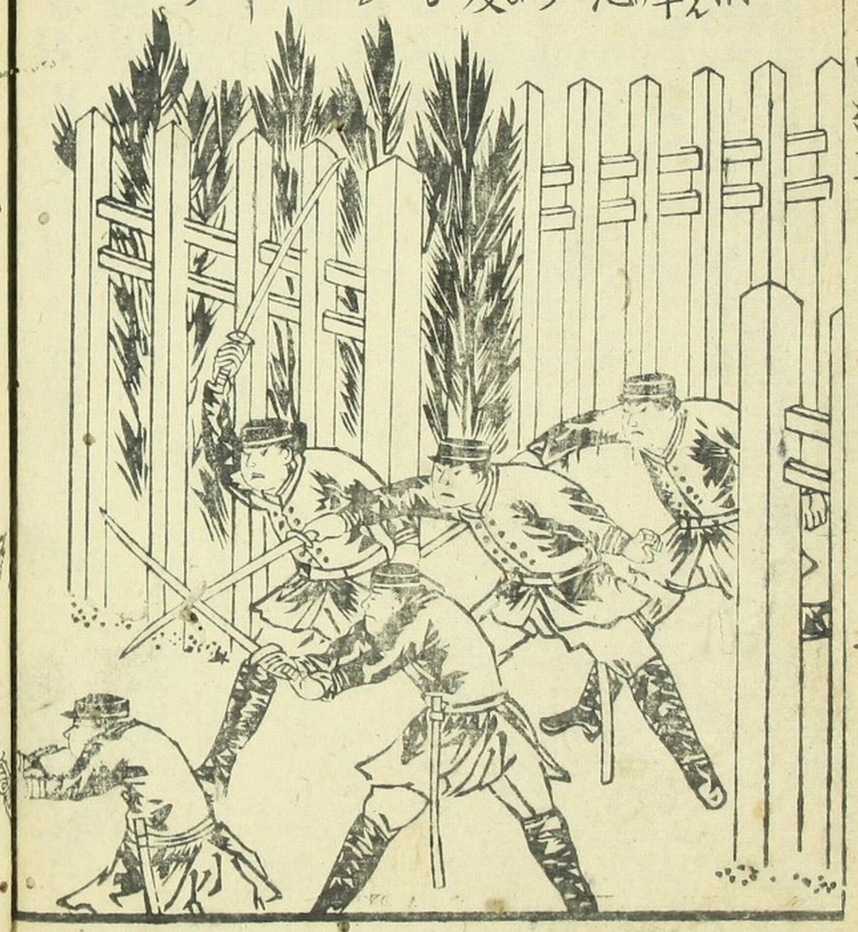
敗走ねしりる又鹿兒嶋の町家と士族屋鋪一里半程燒拂ふと在愛ふ熊本縣の士族

池辺吉十郎といふハ文武衆ふ越へ智慮も在兼て外國人と悦同を嫌ひ其後廢刀祿券の事ゞ別して不平を懷き建白を書てハ引裂きゝる事三百もあり此程西郷ふ組し誓て身命を擲ち粉骨碎身の気込ミふて士族を引出して必死ふ戰ひ我命の在ん限ハ此熊本へ官軍を一足ゝり共入ましと彈藥兵器ハ勿論軍用金も周旋して盡カねせーうども

通し其時残念ねがらも

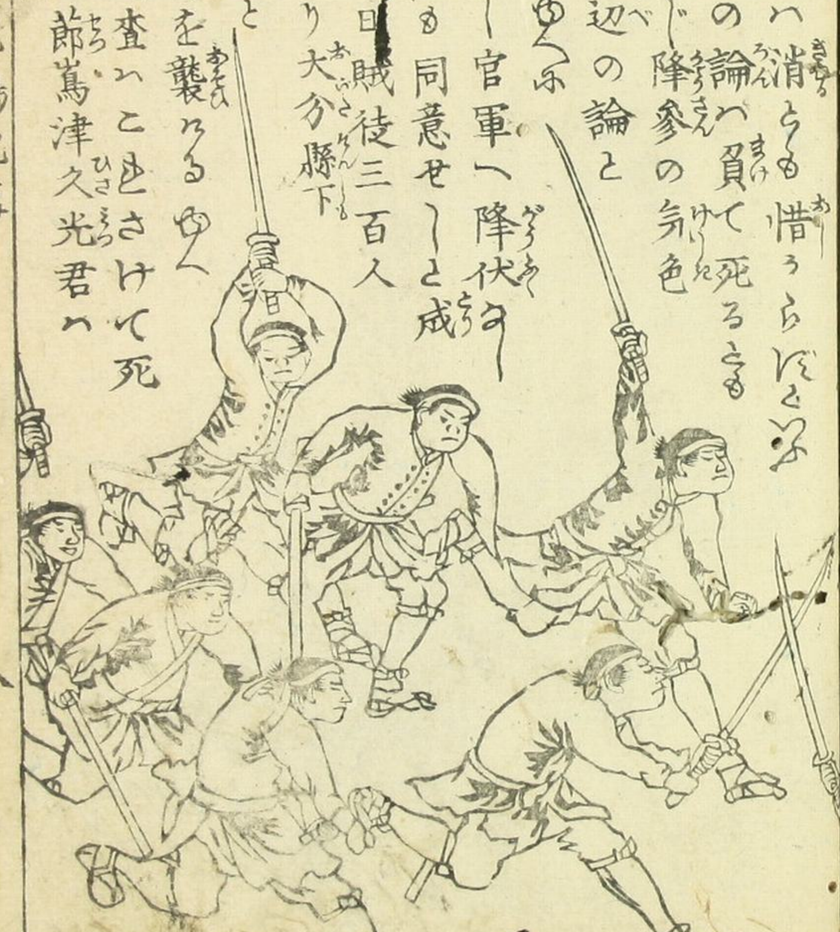
次へ

引退き八代ふて西郷桐野其外と軍議をなし池辺へ所詮うなへぬ今度の軍一時も早く降伏なし三ヶ條の歎願を出し内一ヶ條なりとも望のうなひなべ



我々命ハ消ても惜ら ばなし西郷其外の論ハ負て死るとも官軍ハ抗し降参の気色なく故池辺の論と合ひそのゆへふ賊軍を脱し官軍へ降伏なし熊本士族も同意せしと成

五月十三日賊徒三百人計日向より大分縣下谷警察所と区裁判所を襲ひるゆへ官吏と巡査ハこと色さけて死傷なし此節嶌津久光君ハ



鹿兒嶋猪宿の別荘ゑ居らき
しとも
又桜嶋ゑさ
ゆらしとも
云去る日賊徒
熊本を引拂し
時川尻の病
院ゑ残し倉
松と
少
年わ人品よ
く
立派ゑ育し
者と見へ
聞親父が一
同ゑ軍ゑ
出さ
と
遣
夜
苦
し
め
て
心
を
以
親
父
の
前
受
け
上
き
此
足
疵
を
負
ひ
て
近
年
耳
遠
く
と
ま
で
所
詮
軍
ゑ
事
出
来
ぬ
と
歯
ぎ
し
り
を
し
て
天
を
仰
き
地
ゑ
倒
る

れゑ當り手負ひより倉松へ十二年と九ケ月の子供ゑて十四五歳の子供連ゑて國を出立せしへ四月十日の頃の事ゑて倉松へ躰も柔弱ゑして先頃より病気で在しへ内西郷が熊本へ出張すると

ふし頓て倉松を呼び汝
おもを嫡男故假令年ハ
ものゝとても西郷先
生の跡を慕ひ花々
〳〵討死して親父
の心を慰よと云
廻て倉松ハ未だ
全快の体でもなし
息も切るぐら親
父の云つけゆへ
否どりとべ首を
切らるゝ斗り
是非なく出陣の用意よ

拵り親父ゝ傳ゝら草鞋を
ちゝせ帯をゝして
ゆを一下度軍の
門出をきてゝ
らハ再び帰ると
思ふよ負て
帰るべ此刀で
親父ゝ手ふみ
一ト打とのひも
終らぬ内早く
くと責さて
母親ハ別を
惜めども

親父が嚴しく故其まゝ門出なし途中おてきんぐ足と痛朋友の九人は先へ行過倉松一人道中小残さき休泊おて薬を飲浦くハ代迄着〳〵病気とらゝて進み西郷が本陣近く来ると知る人なれが隊をみして居る故ヤレ嬉しや早く先生まに逢ひ何ぞの陣ゑも加ハらんと御船近所み来ると敵方ク流れ玉小當九死一生おて川尾の病院ゑ在官兵入込の時外の者ハ逃去残し者此倉松と外ゑ三人おて隣ゑるさとそ

編輯人　長崎縣士族　第六大區八小區本所柳町十八番地　村井静馬

出版人　第五大區一小區淺草瓦町十一番地　綱嶌亀吉

鹿兒嶋紀事 下

明治十年九月 出版御願

價三銭五厘

新政厚德

鹿兒嶋藩新政府大總督
正三位陸軍大將西鄕隆盛本陣

日向飫肥
大嶋の図

五月八日

薩州山野の斥候引揚の時賊ハ肥後堺迫尾撃ー同十日ハ其賊ゞ水俣へ襲ひ来りー故官軍ハ奮戰ゑして是を退け其時大勝利ゑて

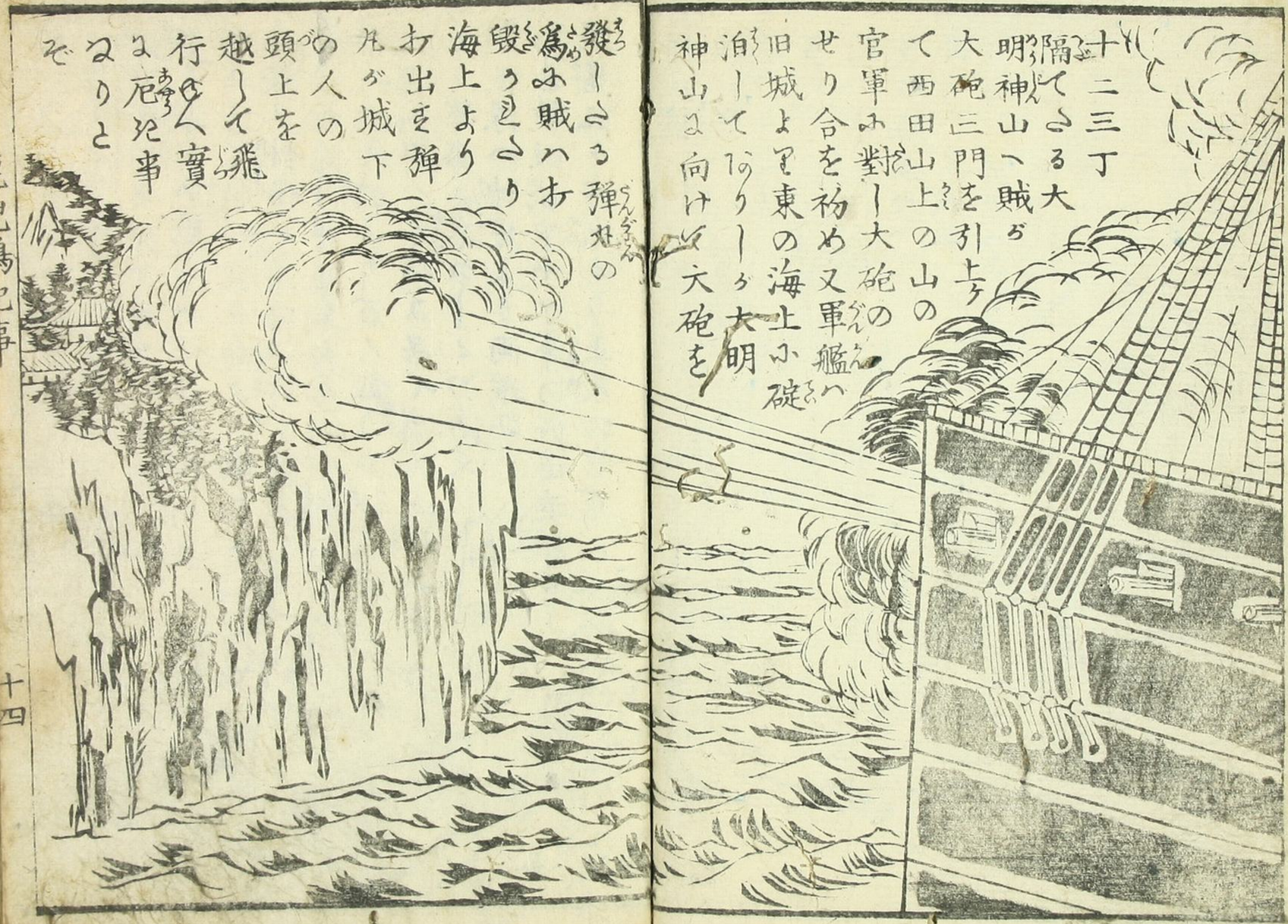
賊の指揮旗をもつさる大山源之助をおとり其外生捕ゞ十二人銃器数多捕ゑー其後昼夜戰ひ止ぶ十四日官軍左翼より進ミ賊塁数ケ所を乗ゑり源川村を焼拂ひ賊ハ狼狽して逃

去り臼砲一門と中隊雄一本其外分捕在数不俟ハ鉄砲の音さえ聞ゑく

戰ひあり警察

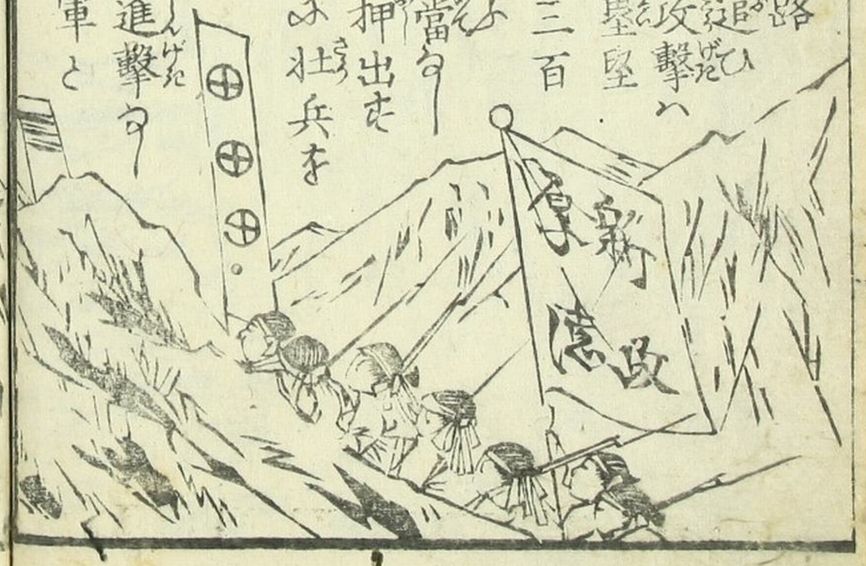
隊ハ嚴重ふ備ヘ盛なり又佐賀の関ヘ上陸の巡査ハ鶴崎ふて賊ふ出逢ひゆふふ切込ミ双方激戰奮勇ふて官軍方二三人の死傷あり賊死傷ハ知ぢ生捕七人程又賊ハ犬飼ヘ向けて引上ケさり五月十八日鹿児嶌田城より

十二三丁隔てる大明神山へ賊が大砲三門を引上げて西田山上の山の官軍に對し大砲の せり合を初め又軍艦へ旧城より東の海上に碇泊してなりしが大明神山に向けて大砲を



發しける彈丸の爲に賊へ打毀うとさり海上より打出る彈丸が城下の人の頭上を越して飛行く實に危き事なりとぞ

同十八日官軍ハ三里餘薩ヶ路のマツカシラとゝ所まで賊を追ひ退け對持ス同廿五日竹田の攻撃ハ頗る激烈の戰爭ゐて未ざ賊堅固ゐして拔ば又日綯より賊三百人餘り佐伯へ襲ひ臼杵ゐ向ふ様子故海陸軍巡査兵を以手當ゐ賊ハゐゐ跡より百人餘りも押出ス模様桐野ハ宮崎ゐ居て盛んゐ壯兵を募り軍事ゐ怠なしとゝゐ又警視隊ハ神堤より両道ゐ別ゐ竹田城下十丁斗の所迫進撃ゐ賊塁三ケ所來とり王来の官軍と



連絡ゐし大進撃ゐ萩原隊ハ岡の臺兵合せて總進撃ゐて大勝利又別府の賊勢ハ佐賀の関より八幡濱へ越へ伊豫路へ出る様子とゝゐ去ル日賊日向へ落つる時病院の傷者を畳の上へのせるまゝゝゐ落ふりとなり爰熊本縣の士族ゐて賊ゐ与して出張して居る者ハ

全く千人斗其中ハ桑村の士族
下村悠平と云老人ハ賊ハ
組し何でも一ト働き
せんと思ひ
息子達を頻りと
勸めなども
長男二男
聞入ぬ却
て色々と
諫めなども
悠平立腹ス
長男と二男ハ勸當
ス三男ハ当時陸

軍少尉試補と
官軍方ハ出張ス。此程手傷
を負わど故相談ハ
五男ハ未六歳故女房ハ
預け四男を連て賊ハ
從がハんとする時女房ハ
さしぐと諫めなども
凝固つさる頑固ざけ
中く聞入ぬとて
賊ハ去がひ四月廿日ハ
官軍ハ生捕らも四男ハ生
死分らぬ女房ハ六歳なる子
供と二人残さも明暮泣ばかり

ハ目ハあ
てらも
ぬ在
さる
ろう
とぞ

又鹿兒嶋地方ハ軍資を家毎に大よそ一軒さへ五圓位出させ割付通り出来ぬ者ハ拘引して酷く責立惨酷のきわまりなく堪うるとと云

頻りと養生中とりふ又同人ハ戦争の初より。

筆を取り一支

西郷ハ居所さへ

聴と知るもの少く日向ハ居るともいむ又豊後ハ出さうもいふ薩州の噂ハい確ハ日向ハ居て四月廿日頃より腰部の病ゑて二人の医師を傍ハ置いハ

ハ

新政厚徳の旗ハ西郷の筆とふ

非ハ

某ハ代ハて石田ハ代ハ

認めるとふ

今度賊中にて働く
小村某とゝ者
にて此男ハ金策
の名人とゝ噂
在去る五月十
八日戰爭ハ官軍
右翼ハ出水街道ヲ
備る兵一小隊大
斥候として賊の
後字九郎左エ門
山中尾山の賊
墨並び陣
小屋を砲撃ち

賊大ゝに狼狽して其墨を
離れ賊ハ八百名を出して喊
是に應ず官軍連發して
の声を発し官軍ハ線内へ
引上る西南に在る官
兵ハ此機に乘じて
進撃し賊の小隊
長隈崎佐平治
分隊長中馬
善太郎を斃し
兵卒一名を
生捕り
賊ハ死骸二
十斗を捨
て在其外多とり等
なり尚ほ進軍
深川より
二合計
先鋒大
野と
所へ手入り

賊墨二ヶ所を乗つとり降伏一人在熊本の士族より此戦ひ午後二時より初り翌四時に終る鹿児嶋探索書に六月十一日佐の搗を渡り天神ヶ瀬を通る時谷山の婦人三人魚を商ひ同所に来りを

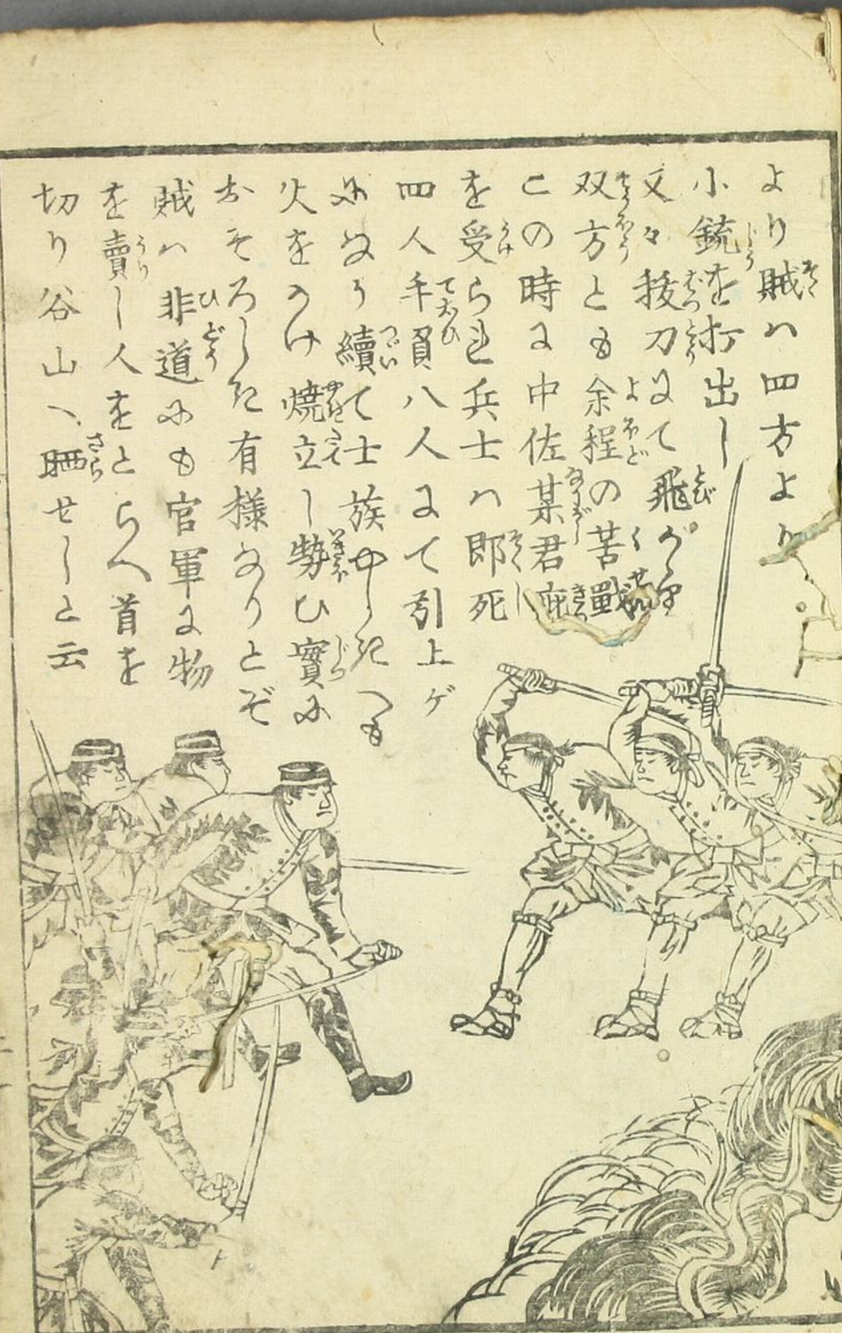
ゆうくせしとなり又賊将貴嶋が勢の半隊へ鹿児嶋の宮軍に降伏せ

賊徒等右の内二人を縛し一人へ縛せば賊地へ連行れる夫より谷山内五ヶ所に至りしに又婦人を三人捕縛し連れ来りさて此婦人等の夫へ官軍に従事せし故

五月二十四日

官軍方より手配ゐより西郷ゞ邸ハ城下より十丁斗南の方ゐ在官軍ハ二分隊左右より押寄せ一声の号令ゐて火をうつる黒烟ハ焔と成て忽ち空ゐ暗くゐるゐと立登る丈見る

賊ハ四方より小銃を打出し又々抜刀ゐて飛ゞ双方とゐ余程の苦戦この時ゐ中佐某君戦を受らゐ兵士ハ即死四人手負八人ゐて引上ゲゐゐ賊ハ非道ゐゐ官軍ゐ物を賣し人をとらへ首を切り谷山へ晒せしと云



熊本河内少佐より六月五日鬼ケ嶽を落し生捕分とりも在

六月九日ふい海陸軍の兵進軍なし大勝利ふて賊ハフタラ村臼杵町へ敗走なし此日臼杵の方へ火の見へしへ地方を焼れしとなり又萩原隊ハ臼杵へ進軍して激戦なり

中賊将ハ桐野とゝも戦ひ未ハ止ず と在り

明治十年四月廿四日御届

長崎縣士族

第六大區八小區本所外手西十八番地

編輯人　村井静馬

第五大區小區浅草瓦町十二番地

出版人　綱島亀吉

佐賀君　業平町　此方　熊本四郎